



タイ北部山岳国境地帯の山村で暮らす、老人と子ども。この村で普段、働き盛りの20~40代の姿を見かけることは少ない（筆者撮影、2016年）。

責任編集 石井香世子

「4番目の子どもが4歳になったとき、香港へ行ったの。子どもに満足な教育を受けさせてやるために。9年間、行ったきりで働いて。私が村に帰ってくると、今度は入れ替わりに夫が台湾へ行った。」

そう語る女性の家に、子どもたちはもういない。今、苦勞して外国で働いて山間の村に建てたピカピカの家で、出稼ぎから戻った2人が、出稼ぎ中の娘に代わり幼い孫たちを育てている。この村では、どの家も大抵そんな感じだ。村にいるのは、かつて出稼ぎをしていた老人か、やがて出稼ぎするだろう子ども——出稼ぎ先で怪我をして「使い物にならなく」なり、満足な治療も補償も受けられず故郷に帰ってきた怪我人や病人。

「この村は、いったい何なのだろう。親と滅多に会えないまま、山村の豪奢な家に暮らすこの村の子どもたちの存在は、現代グローバル社会の何を表しているのだろうか」——私がタイ北部で受けたこの衝撃を、形を変えて共有する研究者たちがいました。そうした研究者たちが集まって生まれたのが、この研究プロジェクトです。アジアでは、1980-90年代を境に、国境を越えて働いたり嫁いだりする人、そうした人からの送金や彼らの帰りを待つ故郷の家族、出稼ぎに来た人たちによって支えられる受け入れ社会……といった状況が忽然と大規模に出現します。もはや後戻りは難しいグローバル化・情報化・新自由主義の大きな歯車が、あちこちで軋みながらも、大きな音を立てて回り始めているのです。このプロジェクトでは、その軋みを探るのに、「子ども」というレンズを通すことが一つの有効な分析手法だと考え、東・東南アジア各地のフィールドの事例から、分析を進めています。

アジアの越境する 子どもたち



gratiation in Asia



トンレサップ湖周辺の水上生活者の子どもたち (©Roengchai Kongmuang 2007年、カンボジア)。

トンレサップ湖周辺の水上生活者の子ども (©Roengchai Kongmuang 2007年、カンボジア)。

この特集は、AA研共同利用・共同研究課題「東・東南アジアの越境する子どもたち：トランスナショナル家族の子どもをめぐる文化・アイデンティティとローカル社会」および科学研究費補助金（基盤研究(A) 海外 no. 16H02737) の研究成果の一部です。